

野鳥だより

—北海道—

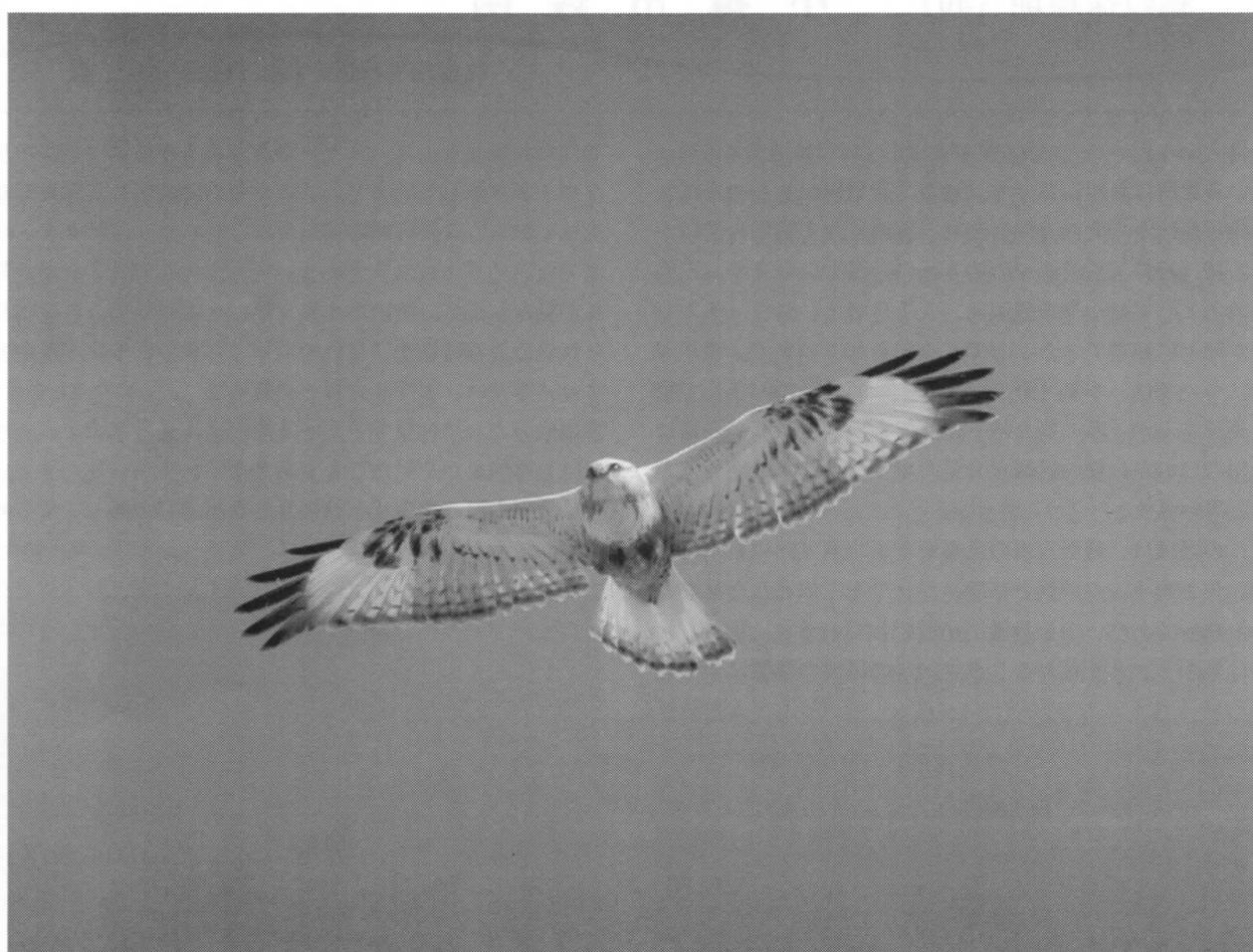
ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第143号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成18年3月21日

ケアシノスリ



2005. 3.20 鶴川河口

撮影者 品川睦生 (札幌市南区)

るのを間近に見たこともあります。

この場所のベストシーズンは、これらの夏鳥が見られる5、6月ですが、海岸に出るとほぼ通年鳥見を楽しむことができます。砂浜ではシギ・チドリ類を観察することができます。トウネン、ハマシギ、ミユビシギなどはもちろん、ソリハシギ、オオソリハシギ、オバシギ、コオバシギ、チュウシャクシギなどもたまに見られます。ヘラシギやコクガンを見たこともあります。積雪期は海岸に平行する道路は通行できなくなりますが、国道から入ってドリームビーチまでは行くことができ、ここから沖を眺めるとクロガモ

やシロカモメのほかにはハジロカイツブリ、カンムリカイツブリなどがしばしば見られます。

森林性の鳥やカモ類が少ないので、これまでにこの場所で観察できた野鳥は110種ほどで、さほど多いというわけではありません。しかし、特に知られた探鳥地というわけでもないこんな所でも、これほどの野鳥が観察できるということは素晴らしいことだと思います。ハマナスやハマヒルガオなどの海浜性の花も楽しめますので、お近くにお住まいの方は一度探訪されることをおすすめします。

2005年夏ヘラサギ鵜川河口に長期滞在

広 報 部

北海道では記録が少ないヘラサギが、昨年(2005年)夏、鵜川河口にほぼ1ヶ月間滞在しました。以下は鵜川町の門村徳男さん(愛護会会員)から寄せられた観察報告です。

2005年7月19日の朝、いつものように鵜川河口に鳥を見に行きました。午前9時頃、河口から700~800m上流に、霞がかかってよくは見えないけれども普段見慣れない鳥がいるのを見つけました。中間くらいまで近づいて見た時点で、ヘラサギあるいはクロツラヘラサギと思い、まずは記録をと、さらに近づいてよく見ました。ヘラサギではありませんか! 昨年はクロツラヘラサギが1週間ほどいてくれ、今度はヘラサギでした。



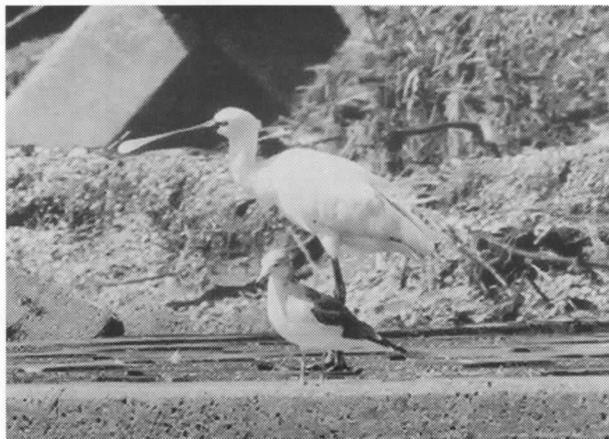
2005年7月19日 鵜川町鵜川河口 門村徳男さん撮影

いつまでいてくれるかなあ。それから毎日のように朝食前に確認に通いました。初めの数日は左岸の池にも入りました。餌を捕るには、嘴を少し開けて右に左にと振りながら前進し、何かを捕まえたら嘴を上にあげて飲み込んでいたのはほとんど河畔林に隠れるような所でした。初確認後20日を過ぎる頃から、早朝は河口近くに

も出てくるようになり、車の中からですと数十mにまでも近寄りました。日によっては朝霧の中にカモメやアオサギと一緒に見られることもありました。

8月21日には日本野鳥の会苫小牧支部、北海道野鳥愛護会、ネイチャー研究会 in むかわ等の探鳥会・観察会が予定されており、それまでいてくれることを願っていたのですが、8月17日までで、翌18日の朝にはいませんでした。とはいえ、30日間も続けて鵜川河口にいてくれました。18日朝に行ったときに気づいたのですが、河口にあった直径1mもありそうな流木がチェーンソーで切られていました。もしかしたら、そのエンジン音に驚いてどこかに飛んでいってしまったのかもしれない。

いったんなくなったヘラサギでしたが、8月24、25日の2日間、再度鵜川河口に現れました。さらにその数日後、苫小牧の会員の人から隣町の河口(厚真川河口)にいることを知らされました。日中に行っても見られませんでした。早朝に行ったときには数回確認できました。私自身は9月13日に見たのが最後で、その次に行った18日には見ら



2005年9月9日 伊達市長流川河口 篠原盛雄さん撮影

れませんでした。でも、苫小牧の人のお話では9月17日は確認できたそうです。

以上の門村さんの報告に加え、伊達市の篠原盛雄さん(愛護会会員)からは、9月9日の長流川河口での観察の知らせと写真が寄せられました。そこでは1日だけしか観察されませんでした。同一個体かどうかの断定はできませんが、鶴川河口から厚真川河口に移動したヘラサギが長流川河口にまで行き、また戻ってきた可能性が十分に考えられます。

100年以上も前の古い記録は別として、これまでに何らかの形で公表されている北海道でのヘラサギの記録は以下のようになっています。

- 1982. 5 浜頓別(山田 1992)
- 1983. 9.17 苫小牧市ウトナイ(山田 1992)
- 1985. 9. 6 女満別(藤巻 2000)
- 1985. 9.19 女満別網走湖畔(山田 1992)
- 1986. 4. 6 苫小牧(藤巻 2000)
- 1986. 4.14 浦幌町豊北(日本野鳥の会十勝支部・釧路

支部 1987)

- 1991. 4.30 羽幌町天売島(北海道新聞1991. 5. 2)
- 1996. 6.12 厚岸町別寒辺牛(北海道新聞1996. 6.18)
- 1997. 5. 4 美瑛市宮島沼(北海道新聞1997. 5.19)
- 1997. 7. 1, 6 旭川市永山(北海道新聞1997. 7. 8)
- 1998. 8. 9 江差町厚沢部川河口(北海道新聞1998. 9. 2)

このうち、1985年の女満別の記録は同一個体とみなされますから、今回の観察以前のものとして10例があげられます。2000年代になってからは初めてです。また、過去の例に比べて今回のものは長期の滞在であることが特徴的です。何らかの原因によって迷行したのでしょうか、夏の北海道がすっかり気に入ったのかもしれません。

[参考資料]

- 日本野鳥の会十勝支部・釧路支部、1987. 十勝と釧路の野鳥 十勝・釧路地方鳥類目録
- 藤巻裕蔵、2000. 北海道鳥類目録改訂2版
- 山田良造、1992. 北海道に舞い降りた迷鳥たち(9)、北海道野鳥だより第87号

冬 の ホ オ ジ ロ

千歳市在住の会員である島崎康広さんから雪の中のホオジロの写真が寄せられました。今年に入ってすぐの2006年1月3日に千歳市青葉公園の千歳川沿いの場所で撮影したものです。4羽ほどいたとのこと。その場所は昨年2月にアオジが観察されたところのすぐ近くで(野鳥だより第140号参照)、「夏鳥」が越冬できる環境なのかもしれません。

同じく冬のホオジロについては、札幌市東区在住の会員である片山 實さん、慶子さんご夫妻からも観察記録と写真が寄せられました。2006年1月7日、場所は札幌市東区中沼で、9羽を確認したとのこと。遠距離か

らの撮影のため小さくしか写っていないのですが、原版のカラー写真ではホオジロであることが容易に確認されます。冬の青空を背景にして樹氷上にとまっているのがとても印象的です。

ホオジロは大部分が夏鳥ですが、道南や道央の平野部を中心としてごく少数が越冬することは以前から知られています。でも、実際に見たことがある人は少ないかもしれません。地球温暖化が問題となっている近年ですが、もしかしたら鳥たちの習性・行動にも何らかの影響を与えつつあるのかもしれません。

文責 広 報 部



2006年1月3日 千歳市青葉公園



2006年1月7日 札幌市東区中沼

宮島沼、最新情報!!

美唄市 牛山 克巳

宮島沼は、空知中央部、石狩川流域に残された水面積30ヘクタールほどの小さな沼です。毎年秋と春、この小さな沼にあふれんばかりに訪れる水鳥たちに関しては、探鳥会に訪れている皆さまは良くご存じかと思います。それら水鳥たちにとっての重要性が認められ、宮島沼がラムサール条約に登録されたのは、2002年11月のことでした。ここでは、宮島沼に飛来する水鳥の代表格であるマガンの最新情報に加え、宮島沼の保全と活用に向けた最近の動きについてご紹介いたします。

マガンの渡りに異変あり!?

昨年の秋、マガンは例年通り9月半ば過ぎに姿を現し、その後急激に数を増すと、10月中旬にはほとんどが南下してしまいました。しかし、この「例年通り」が始まったのは、実は最近のことなのです。10年前の記録と比べると、マガンの飛来は確実に早くなり、また、滞在期間も短くなっていることがわかります(図1)。この背景には、繁殖地や越冬地の環境変化があると考えられますが、その理由はまだ完全には解明できていません。

また、宮島沼からマガンがほとんど南下した後、最近ではなぜか、宮島沼の少し北にある茶志内沼や袋地沼に移動して滞在する群れがいます。それは、茶志内沼や袋地沼の周囲にはまだ豊富な食物が残っていて、例え雪が降っても宮島沼周辺より積雪が少ないため、ギリギリまで南下を待てる環境が整っているからなのかもしれません。10年ほど

前から道内で越冬を始めた小群や、条件さえ良ければ中継地である秋田県八郎潟周辺で越冬する群れが現れたように、マガンの渡り行動の柔軟性を示す一例と言えるのではないのでしょうか。

春には、マガンは雪解けを追うように道内を北上し、宮島沼に集結します。しかし、その間どこをどのように利用し、どうして最終的に宮島沼に集まるのかなど、道内の渡りに関する詳しい生態はわかっていませんでした。このような情報は、千歳川の浚渫に伴う幅広水路(通称長都沼)の水面積減少等の生息地の環境変化が、実際にマガンにどのような影響を及ぼすかを知るためには不可欠です。そこで、昨年の春、多くのボランティアの協力を得て、北上するマガンの分布調査を鶴川町から沼田町にかけての広大な範囲で行いました。その結果、マガンは積雪の制限を受けながらも、田んぼが多く、ねぐらから近い場所を好んで利用することや、道内における個々の生息地の特徴が明らかになり、渡り経路を通じた生息地の保全管理方法を提言できるようになりました。

宮島沼に集結したマガンは、決まって4月終わりから5月始めの「渡り日和」の日に、一斉にロシアへ飛び立ちます。その一部は、ノンストップで約1000km離れたカムチャツカ半島まで10時間かけて飛び、その後ベーリング海に面した繁殖地にたどり着きます。一部のマガンは、サハリンを北上する渡りルートを選びますが、その繁殖地は特定できていません。また、マガンの東アジア地域個体群とは、

日本、韓国、中国で越冬するマガンを指しますが、各々の国で越冬するマガンの繁殖地での分布や交流などについては、ほとんど分かっていません。これらのことを解明するために、最近では、標識調査や衛星追跡に加えてDNAや安定同位体の解析もされるようになってきているので、今後の進展が楽しみです。

マガンは増えているのか?

昨年の春、宮島沼におけるマガンの最大飛来数は、約6万6千羽を数えました。どんどん増え続けるように見えた宮島沼のマガンも、ここ数年を見ると頭打ちになったように見えます(図2)。しかし、「これからもマガンは増えるのか?」と度々聞かれる疑問には、まだ明確な答えを出すことはできません。

マガンは、1971年に天然記念物に指定され、狩猟鳥から除外されました。国内で越冬するマガンは、

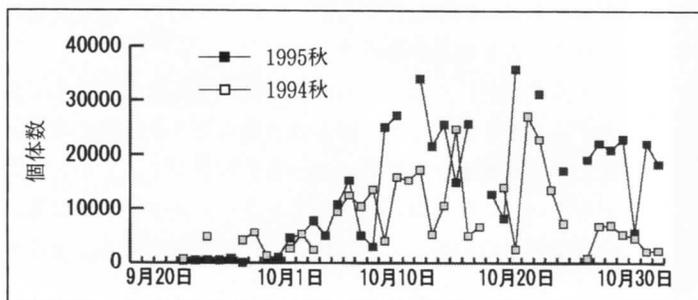
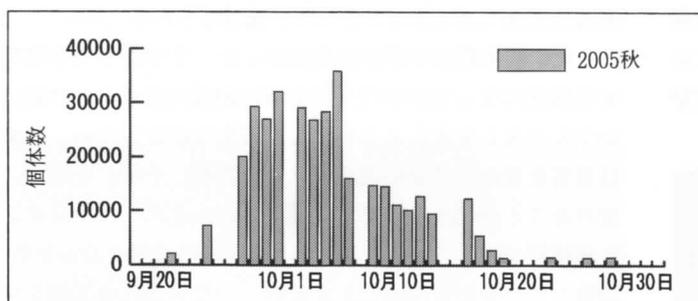


図1 マガン飛来時期、滞在期間の変化

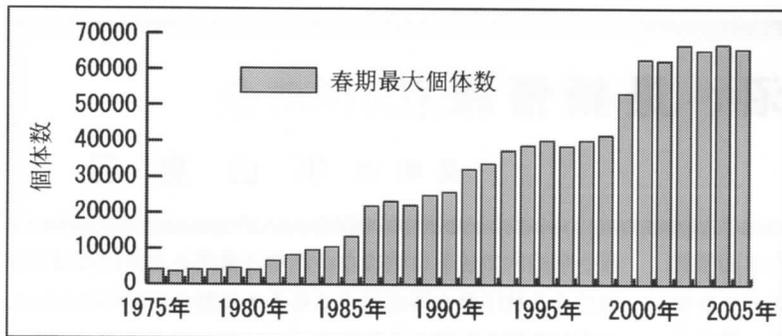


図2 マガン飛来個体数の変遷

その後しばらくして急激に増え始め、宮島沼でも同様の傾向を示しています。マガンが増え始めたのは狩猟圧が無くなったからということはあるかもしれませんが、それ以外の要因も考えられます。例えば、コンバインの普及に伴い田んぼの落ちモミが増え、国内の採食環境が良くなったことで生存率や出生率が上がったのかもしれませんが、国内の越冬環境が良くなったことで、中国や韓国で越冬していたマガンが移入してきたのかもしれません。

いずれにしても、生存率や出生率などの個体数変化に関する基礎的な情報は、今後のマガンを考える上でとても重要であるにも関わらず、ほとんど分かっていないのが現状です。特に、成幼比を調査することで推定できるマガンの出生率については、注意深く見守る必要があるかもしれません。マガンの出生率は、地球温暖化の影響を受けて繁殖地の雪解けが早くなったり、幼鳥の食べる植物が生長しやすくなったりすることで、今後増加するのではないかとされているからです。ただ、それも一時的なことで、マガンが繁殖するツンドラが森林地帯に移行し始めると、マガンは一転絶滅の危機に瀕するとも言われています。

今、長期的な視点からマガンの保全や管理を考えるため、生存率や出生率などを推定して、マガンの個体群動態の解析を進めようとしています。その基礎となるのは標識情報であることから、宮島沼ではマガンの標識調査も行っています。道内外でマガンの標識個体を見つけた際には、ぜひその情報をお寄せください！



標識のついたマガン

小麦食害はどうなった？

宮島沼がラムサール条約に登録されるにあたって、一番の問題となっていたのが、マガンによる小麦食害です。小麦食害問題は、鉛中毒によるハクチョウとマガンの大量死を受けて宮島沼の狩猟禁止措置を検討した1989年に、保護措置による水鳥の増加が引き起こす食害を懸念した周辺農家が声をあげたことから始まっています。実は、当時は食害を起こすのがガンなのかカモなのかさえはつきりし

ない状況でしたが、やがてマガンの数が増え、実際に食害も顕著になったことで、問題が顕在化し始めました。

一方で食害に関する研究も進み、マガンが小麦食害を起こすのは、水鳥の採食活動や様々な農業活動によって、主要食物である田んぼの落ちモミが少なくなるからだということが分かりました。この場合、小麦畑に防除器具を設置しても、小麦以外に食べるものがないマガンには慣れが生じやすく、効果が持続しないことが予測されます。そこで、小麦畑の防除を徹底すると同時に、マガンが安心して採食できる「代替採食地」を整備することが効果的な対策と考えられました。

そこで地元自治体は、周辺農家へ防除資材を配布すると同時に、代替採食地を実験的に整備することを始めました。代替採食地は、田んぼに屑モミを散布して整備することにしていましたが、効果的な散布方法について実験が重ねられました。特に注意を要したのが、モミの散布量です。散布量が多すぎると、食害対策としての効果が無くなるばかりでなく、マガンが本来小麦を採食して得られるエネルギー量以上を摂取してしまい、野生動物の管理方法として好ましくないからです。今では防除器具と代替採食地に関するデータの蓄積と解析も進み、費用対効果も含めて最も実用的な方法を提案できるようになっています。

ただ、防除器具や代替採食地は、あくまでも食害が発生する状況になってから行う対症療法的な対策です。対策にかかるコストを考えると必ずしも万全ではないため、まずは食害を発生させない環境づくりを進め、予防的な防除に努めることが先決なのです。例えば、小麦の葉は生長すると繊維量が増し、マガンにとっては不適な食物となるため、丹精して小麦を育てることもその一つですし、小麦畑をマガンがあまり利用しつづけない防風林や道路に面した場所に移すことも効果があります。

小麦食害が田んぼの落ちモミが無くなることによって発生することを考えると、田んぼの落ちモミを確保することは、小麦食害を予防するには一番の対策です。しかし、だからといって農家は、落ちモミを著しく減少させる稲藁の除去や早期の田起こしを止めることはできません。そうすれば、稲の生育や農作業の進行に影響を与えるからです。効率性の追求と品質向上が厳しく求められる近代農業のも

と、米価の低迷が続いている現状では、農家はマガンのため手間をかける余裕が全くないのが現状なのです。

「ごはんもまがも田んぼのめぐみ」

宮島沼のマガンは、周辺の田んぼによって支えられています。マガンだけではなく。カエルが鳴き、トンボが舞い、時期がくればハクチョウが降り立つという田園風景そのものも、すべて田んぼがもたらす「めぐみ」だと言えます。世界的にも認められる自然と、生きもの豊かでのどかな田園風景を支える地域農業の価値は賞賛に値すると思うのですが、実際には、そのような「価値」は近代農業においては認められていません。

そんな中、最近では、田んぼでお米を生産する場としてだけではなく、地域の豊かな自然をも生産する場として、その価値を再認識し、支援する動きが活発になってきました。オオヒシクイやトモエガモ、タゲリなどの生息地保全を付加価値としたブランド米についてはご存知の方も多いでしょう。実は、滋賀県や福岡県などの政策を皮切りに、国の政策も、環境保全を重視する農業を支援する方向へ移行しようとさえしています。もし、宮島沼の自然を支える地域農業の価値が認められ、農家が小麦食害を心配せず農業を営み、野鳥などの多くの生きものが生息しやすい空間が形成されるのであれば、野鳥愛好家としてもワクワクすることだと思いませんか？

宮島沼の保全と活用を考える市民団体「宮島沼の会」では、このような考えを少しでも普及させ、実現への道を探ろうと、昨年「ごはんもまがも田んぼのめぐみ」というシンポジウムを開催しました。しかし、自然を支える農業を支援する仕組みができるには、まだしばらく時間がかかりそうです。それまでの間、宮島沼にいらした際には、ぜひ美唄・北村産の農産物を買って、地域の農業を応援してください。そうすることで、地域の農業は初めて自然の価値に気づくことができ、自然にやさしい農業を推進する活力が生まれるからです。



藁の家づくり

湿地環境としての宮島沼

マガンなどの水鳥に注目していると、ヨシなどの湿性植物、たくさんの魚や水生昆虫、そしてそれらを支える「湿地」としての宮島沼には、なかなか気づかないかもしれません。想像がつかないかもしれませんが、ほんの100年前まで、宮島沼は石狩川流域に広がる広大な湿原の一部だったのです。運良く開拓の波を逃れた宮島沼は、当時の湿原の様子を今に伝える、数少なく貴重な「湿地」なのです。

しかし、100年という年月の間に、周辺環境だけではなく、宮島沼自体も大きく変貌してしまいました。開拓当時は、12万坪（約40ヘクタール）はあったと言われる水面も、乾燥化や植生の侵入により年々縮小しています。また、透明で湧き水があったという水も、今では富栄養化が著しく、アオコさえ発生します。こうした環境の変化に伴って、ジュンサイ、マツモ、ミズゴケなど、かつては普通にみられた自然が次々と消滅してしまいました。水生生物に関する情報は少ないのですが、開拓当時にはコイを数万尾放し、その後も釣りのメッカとして栄えたと言う経緯からも、在来の生物相はほとんど残されていないのではないかと危惧されます。

湿地環境の基本となる水質に関しては、ここ20年間で劇的に悪化していて、水鳥の急激な増加が寄与していることが示されています。宮島沼には流入河川がなく水が滞留してしまうため、水質改善のためには水の流排水を行うことが先決と考えられます。また、底泥や植物の枯死体などに蓄えられた栄養分を定期的に除去することも必要かと思われます。

このような環境変化は、宮島沼だけでなく、手形沼、親子沼、三角沼など周囲に散在する小さな沼でも確実に進行しています。完全に乾燥化してしまった沼や、埋め立てが進んでいる沼もあります。これらの沼の中で、法的に守られているのは、宮島沼だけです。だから、せめて宮島沼だけにでもかつての湿地の面影を取り戻せるよう、今後も調査活動などを進めていきたいと考えています。

「宮島沼水鳥・湿地センター」

昨年まで宮島沼で皆さまをお迎えしていた「野鳥観察センター（旧大富会館）」は、もう存在しません。実は昨年末から、環境省による新施設「宮島沼水鳥・湿地センター」の建築工事が始まっているのです。残念ながら、今年の水鳥の飛来期にはまだオープンできない見通しですが、来年の春には確実に皆さまにご利用いただけると思います。

新しい施設は、木造平屋建てで、床面積は330平方メートル。展示室、レクチャー室、調査・研究室などがあり、もちろんきれいなトイレもあります。その内容はともあれ、宮島沼の保全という観点から考えると、様々な活動や交流を進める「拠点」ができたということ自体にとっても大きな意味があります。今までできなかった来訪者への自然解説

や普及啓発も可能になりますし、環境教育や様々なボランティア活動の拠点、来訪者と地域農業者の交流の拠点、宮島沼に関わる様々な研究活動の拠点としても活用できることでしょう。

また、今後は新施設が宮島沼の保全活動の中心として機能していくため、宮島沼における様々なルールづくりにも着手したいと考えています。例えば、来訪者による水鳥への餌付けもその一つです。餌付けは、水鳥の健康や生態への影響、周辺環境への影響、そして人と野生動物の関係性のあり方という観点から盛んに議論されるようになっていきます。宮島沼の会では、宮島沼における餌付けのあり方について意見の集約も行っていますので、是非ご協力ください。



宮島沼のマナヅル 2005年4月

「宮島沼水鳥・湿地センター」の着工に先立って完成した施設もあります。宮島沼の会が、サントリー世界愛鳥基金の助成を受けて作った観察小屋、「藁の家」です。宮島沼は狭く、また、来訪者と水鳥の間に遮蔽物などが無いことから、一部の種を除いた水鳥は、観察ポイントから遠く離れた水面しか利用できないことが問題としてあげられていました。その対策として観察ポイントの一つに観察小屋を建て、快適に野鳥を観察できるシェルターとしても活用して頂きたいと企画しました。地域にふんだんにある藁を壁材とし、土壁を塗った面白い建物です。是非活用してください。

オマケの野鳥情報

2005年4月上旬から4月26日にかけて、宮島沼とその周辺の農耕地で、左足の足首から先が切断されているマナヅルが観察されています。その詳細は、宮島沼の会の会報「宮島沼」第15号に掲載されています。宮島沼周辺では、数種のツルやコウノトリが観察されたこともあり、大型の湿原性の鳥類が一時的にでも生息できる要素をまだ残しているのかもしれませんが。こうした要素を大切に、その他の欠けている要素を補えば、総合的に自然度豊かな環境が生まれてくることでしょう。

【閑話】野鳥あれこれ

「ヨタカ、カワセミ、ハチドリは兄弟か」

宮沢賢治は、童話「よだかの星」で、ヨタカ、カワセミ、ハチドリ（賢治によれば蜂雀）を兄弟としている。この作品は「よだかは、実にみにくい鳥です」という一文から始まる。しかし「かへって、よだかは、あの美しいかはせみや、鳥の中の宝石のやうな蜂すゞめの兄さんでした」となっている。単にそういう組み合わせを設定しただけなのか。それとも、何かの根拠があつたのかなのか。根拠があるとすれば、常識的には同じ科に属する鳥ということになるだろうが、今一つの見方が可能である。同じ家に住むものを兄弟と考えることができる。例えば、図鑑の同じページに載っている場合が、これに相当するだろう。詩「花鳥図譜七月」で、この兄弟関係を妹に説明し「さうだとさ／第一それは女学校だかどこかの／おまえの本にあったのだぜ」と言っている。妹の持っていた本が図鑑だとすれば、ハチドリが出ていなのだから日本のものではない。多分、アメリカの小冊子ではないかと想像する。

札幌市中央区 武 沢 和 義

私たちがよく使う「フィールドガイド日本の野鳥」の表示法はアメリカの鳥類画家R. T. Petersonの考案によるものである。私の手元にあるPetersonの「First Guides Birds」には、3ページ続いてhummingbirds、nighthawks、kingfishersが出ている（但しカワセミは載っていない）。これより古い図鑑と思われるが、説明がもう少し短いものだと、見開き2ページに納まり、一家族という感じになる。12年程前、ワシントンDCにあるスミソニアン自然史博物館を見学したことがある。鳥類の進化系統図があり、その中でハチドリ、ヨタカ、カワセミの図が並んでいたのを見た記憶がある。丁度、そのことに興味を持っていた頃だったので、多分記憶違いはないと思うがあまり自信はない。大正9年発行の「東京帝室博物館・天産部・列品案内目録」にカワセミ科、ヨタカ科、ハチドリ科がブッポウソウ目の鳥として分類されていたということを比較的最近2冊の本で読んだ。こんなところから兄弟と設定したとも考えられる。

ケワタガモ観察記

新十津川町 岸 谷 美恵子

今年(2006年)に入ってすぐのことですが、北海道稚内市にてケワタガモを観察したので報告します。

毎年正月には道北に行くのですが、1月2日、午後2時30分頃、稚内市恵比須の船着場横の道路を車で走っていたところ、嘴から頭部へのシルエットが気になる1羽のカモが、やや遠くの岸壁寄りにいたので観察することにしました。よく見るために車で岸壁に近寄り、車内から望遠鏡で観察しました。一緒にいたシノリガモよりも明らかに大きな潜水性のカモで、前述のシルエットに加え、目の上から首に流れる白い線(斑)が目立っていました。また、遠目では他のカモの雌の赤褐色と同じように見えていた背中が、近くから見るととても美しいのが印象的でした。でも、この時は図鑑を持参していなかったのと、見たこともないカモだったので、何というカモか決めることができず、写真を撮っておいて後で判断することにしました。

当日の観察および写真、そして図鑑調べにより得られた結論は「ケワタガモの雌」というものでした。その大きさ、羽模様、独特の顔つきなどからケワタガモ雌の可能性には容易にたどり着きましたが、さらに識別点となった特徴をいくつかあげます。

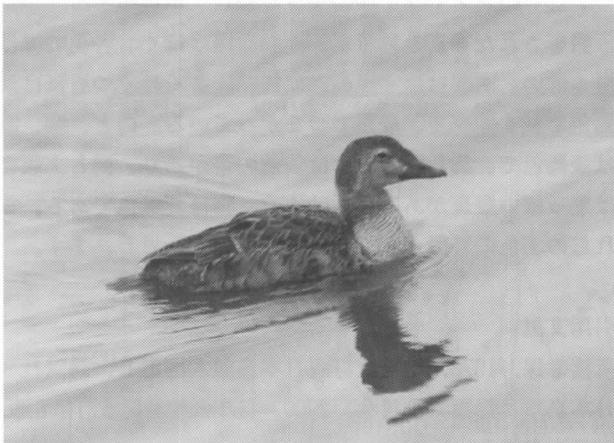
- (1) 目から首へカーブする白線がある。
- (2) 嘴の基部が目の方に食い込んでいる。
- (3) 背中が赤褐色で黒褐色の斑が入っている。
- (4) 写真でははっきりしないが、大雨覆の先端に白線があるようだった。

以上ですが、ケワタガモ雌にしては胸が白っぽいのが気になりました。このこともあり、さらに慎重を期して、写真を山階鳥類研究所の平岡 考さんに送り確認していただいたところ、種の同定そのものはケワタガモで問題ないと

いう返事をいただきました。また、識別のポイントは、顔の側面の部分の嘴に向かってつきだしている羽毛の生えた部分の形で、もっと尖って鼻孔まで及んでいればオオケワタガモ、もっとまっすぐであればコケワタガモ、写真の程度に半円形につきだしていればケワタガモということでした。性別年齢は、胸が白っぽいこと、上面の羽毛に赤い羽縁と白っぽい羽縁のものが混在しているので、1年目の雄かもしれないが、これについては文献等でよく検討が必要とのことでした。

新年早々に珍しいカモを見られたのはとても嬉しいことでした。もし、このカモがケワタガモの成鳥雄であったら大騒ぎになっていただろうと思います。目立たない雌の色合いであったから、あまり気にされることもなく、静かに泳いでいられたのかもしれませんが。

【編集部注】ケワタガモはユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北極圏で繁殖し、冬になるとやや南下します。日本に飛来するのは極めてまれで、これまでに根室の納沙布や野付、網走の網走港や能取半島など、北海道東部でしか記録がありませんでした。最初の記録は1970年3月2日の根室花咲港でのもので、以後散発的に5例ほどあり、最近のものは1992年2月23日の根室落石港での記録となっています(高田令子、2001、根室支庁鳥類リスト、根室市博物館開設準備室紀要第15号)。ただし、これらの記録はどれも写真などの具体的証拠を伴うものではなく、今回のように写真を伴った報告はおそらく初めてと考えられます。また、北海道東部ではなく、稚内市という北部での記録であることも注目されます。なお、成鳥雄の記録はこれまで1例もないとみなされます。



ケワタガモ 2006年1月2日 稚内市恵比須 筆者撮影

余市町におけるコバシチドリの観察記録

小樽市 梅木 賢 俊

2005年9月19日、後志管内余市町栄町の大浜中海岸でコバシチドリ1羽が観察されました。最初に見つけたのは、余市町在住の山田忠重さん(日本野鳥の会小樽支部会員)です。山田さんは、余市町栄町の大浜中海岸を野鳥観察のフィールドの一つにしているのですが、このたびの山田忠重さんによるコバシチドリ観察の経緯等は、次のとおりです。

9月19日、夜明け前に自宅を出発し、午前4時40分過ぎ大浜中海岸に着いた。観察を始めた直後、砂浜に1羽の鳥を見つけたが、はっきり見えなかった。当日の天候は晴れていたが、日の出時刻は午前5時20分ごろであったので、周囲はまだ薄暗かった。双眼鏡で見ると、これまでに見たことがない鳥であった。初めて見た印象は、目が愛くるしく、眉斑が後頭でつながってよく目立ち、ふっくらした感じであった。手持ちの図鑑「シギ・チドリ類ハンドブック」で調べると、コバシチドリの図と記載が一致した。ビデオカメラで撮影したが、当日は、あいにくスチールカメラを持参していなかったので、一度自宅に戻り、再び大浜中海岸に向かった。

9月19日の観察時間は、午前4時40分過ぎ～午前9時30分(ただし、20分ほど現場を離れた)。この間、コバシチドリは短時間であるが採餌をしたり、近くにいたメダイチドリを追い払ったりしたが、多くの時間は、砂浜の漂流物などの中で休息していた。メダイチドリと並んだときは、コバシチドリの方が大きく見えた。また、鳴き声は特に聞かれなかった。この日は、余市町在住の鳥友だちに携帯電話で連絡し、複数の人に見てもらうことができた。

9月20日、山田さんをはじめほかの観察者は、同所においてコバシチドリを確認できなかった。9月21日、山田さんは同所においてコバシチドリを確認できなかったが、余市在住の観察者が確認している。

9月22日、夕方、山田さんは大浜中海岸に観察に行ったが、午後4時40分ころ砂浜から1羽の鳥が飛び立ち、海岸に沿って西方向へ飛び去り、見えなくなった。それがコバシチドリであった。その後は、同海岸でコバシチドリを見ることはできなかった。

したがって、コバシチドリは、余市町大浜中海岸に、未確認の一日があるものの、9月19日から9月22日まで滞留していたと思われる。

日本鳥類目録改訂第6版(日本鳥類目録編集委員会2000)によると、コバシチドリは、旧北区、新北区の縁に

分布。スカンジナビア北部からチュコト半島、アラスカ西海岸の北極地域のツンドラ、南はシベリア南部、モンゴル北西部で繁殖。また、中央ヨーロッパ、イタリアで散発的に繁殖。

南ヨーロッパ、北アフリカ、アラビア半島、イランで越冬。日本、アメリカ西部で不定期に越冬。

日本では、迷鳥。北海道、本州(青森、宮城、茨城、栃木、千葉、東京、神奈川、新潟、静岡、愛知、三重、奈良、和歌山、広島)、四国(愛媛)、九州(福岡)、奄美大島、沖縄島から記録がある。

日本鳥類目録改訂第6版記載の<北海道>の記録は、渡鳥支庁函館1854年9月(清棲1978)である。このほかの記録では、網走1976年(高野1992)がある。未発表記録では、シギ・チドリ類全国一斉調査(財団法人日本野鳥の会)における根室市春国岱1984年9月15日(小畑淳毅、写真有)がある。



コバシチドリ 2005年9月19日 余市町栄町

撮影された写真を見ると、上面は黒っぽく、各羽の縁は白っぽい。頭部は白と黒の斑模様で、よく目立つ眉斑は淡褐色で長く伸びて、後頭でつながっている。のど、胸、腹は淡褐色で、胸と腹の境には淡色の帯があり、胸と上腹には黒っぽい縦斑がある。嘴は黒く、脚は黄緑色である。これらの羽色の特徴から、幼鳥ではないかと思われます。

引用文献

- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社
- 日本鳥類目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会
- 高野伸二. 1992. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会



ウトナイ湖
2005.11.13
札幌市西区 北山 政人

朝のうちは小雨、雪が降っていた時もありましたが、探鳥会が始まる頃には青空が出て、天候の心配は無くなりました。寒さの方も、この時季にしてはたいしたこともなく、あとは鳥の方が良ければ、最高の探鳥会といったところです。ウトナイ湖は鳥を見始めた頃から、もう数えきれないくらい訪れています。ここで初めて見ることができた鳥たちも数多く、思い入れの深い探鳥地の一つです。

この時季のウトナイ湖の主演は、カモ類やガン類、ハクチョウ類などの水辺の鳥たちでしょう。この日はマガンとヒシクイの群れがウトナイ湖で休んでいました。オオハクチョウとコハクチョウが並んでいて、両種の識別ポイントをじっくりと観察することができました。両種とも、嘴の黒い面積にはずいぶんと個体差があることがわかります。カモ類は多くの種類を見ることができました。雄はエクリプスの状態よりも、美しい羽衣になっている個体が多くなりました。ヨシガモの雄には、緑色のきれいな頭になっている個体もいます。一見すると地味、しかしよく見ると美しい羽衣をもつオカヨシガモの雄もいます。アメリカヒドリ雄が1羽確認できました。他にも目の後ろが緑色のヒドリガモがいましたが、頭部の色がアメリカヒドリよりも赤茶色味が強く、おそらくヒドリガモとアメリカヒドリの雑種でしょう。ウトナイ湖では両種の特徴を持ち合わせた雑種と思われる個体を、今まで何度も見えています。本当に、これはアメリカヒドリと断言できる個体に出会うことは少ないと思います。

その他にオオバンやカンムリカイツブリ、ダイサギなどを観察できました。鳥ではないのですが、エゾシカが3頭、立派な角をもつ雄も現れて、ヒシクイとマガンの群れが降りている手前の水面を進んでいったのは、予想外のできごとでした。期待していた猛禽類も、オジロワシやチュウビを望遠鏡で観察することができました。

冬を目前にしたウトナイ湖の雰囲気、じっくりと味わった一日でした。探鳥会終了後、イソシギの小径の終点付近に行くと、ダイサギ14羽の群れが見られました。

【記録された鳥】カイツブリ、カンムリカイツブリ、ダイサギ、トビ、オジロワシ、チュウビ、オオタカ、コハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、マガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ツグミ、ハシブト

ガラ、シジュウカラ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 34種

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、岩崎孝博、牛込直人、氏家正毅、越後文慈、大表順子、荻野裕子、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎、荻部栄一、河野美智子、北山政人、小堀煌治、笹森繁明、佐藤史夫、品川睦生、島田芳郎・陽子、鈴木麻美、高橋良直、恒本英子、戸津高保・以知子、波田良三・典子、畑 正輔、平野規子、広木朋子、藤井亜生、辺見敦子、道川富美子、山口和夫、横山加奈子 以上 34名

【担当幹事】北山政人、道川富美子

野幌森林公園探鳥会
2005.12.4 札幌市中央区 白澤 昌彦

この時季は天候が不安定な日が多いが、この日は素晴らしい青空が広がる穏やかな天気でした。しかし、さすがに気温は低く、薄い軍手では指先が冷たくなる。昨年は既に雪が積もっていたというのに、今年は遊歩道にまったく雪はない。

スタート直後にヤマゲラが登場し、晴天のせいかカラ類の動きもあり、大いに鳥を楽しめるのではと思った。早速最後尾のグループがマヒワを発見。早々に見られたのでこの後も見られるだろうと思ったら、結局この時だけという結果になってしまった。ほとんどの人は見ていないことになる。カラ類はまだ本格的な混群を作っていないようで、小さな群れが見られる程度である。明るい陽射しの中でカケスの綺麗な姿を見ることができた。青空を仰ぐとトビ6羽がゆったりと旋回し、気持ち良さそうに飛んでいるように見える。大沢園地では、シメを見つけ久し振りの出会いに皆さんはじっと見ていた。さらに、逆光の中、白っぽい陰影を写し出しながら飛び回るハシブトガラは非常に印象的。葉が落ちて、陽の光が本当に眩しい。ウソの声はするが、姿は見られなかった。意外と鳥が出ないので目と耳を駆使して鳥を探す。やっとキバシリを見つけ何人かで確認する。気がついたら前方に参加者の姿がなく、桂コースをひたすら追いかけて、皆さんと合流できたのは、スタート地点でした。



ウソ

【記録された鳥】トビ、フクロウ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、ウソ、シメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 20種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、牛込直人、大表順子、香川 稔、亀井厚子、河野美智子、小西美美枝、小堀煌治、佐々木裕、笹森繁明、品川睦生、白澤昌彦、鈴木麻美、須田 節、高田征男、高橋良直、田中 洋・雅子、辻田捷紀、戸津高保、中正憲信・弘子、波田良三、畑 正輔、濱野由美子、早坂泰夫、平野規子、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山口和夫、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上 38名

【担当幹事】白澤昌彦、戸津高保

小樽港探鳥会

2006. 1. 22 札幌市手稲区 笹谷 俊章

土、日はたいてい仕事のため探鳥会は参加したくてもできませんでした。今回、初めての参加でしたがとても楽しい一日を過ごすことができました。当日の幹事さんにはこの場を借りてお礼申し上げます。

白澤さんのバス車内でのシノリガモやクロガモについてのお話がとてもおもしろくて勉強になりました。ケイマフリやハシブトウミガラスとは数年ぶりのうれしい再会でした。フェリーターミナル裏でのコオリガモも白くてきれいで印象に残りました。コオリガモは浮上と潜水を繰り返していたので容易に見られませんでした皆さんの注目の的になっていました。最後はこれまた人気の高い赤い鳥、ハギマシコを見て鳥合わせになりました。多くの人の目があると鳥の発見も早く自分一人では見つけれない鳥を見ることができるというのは大きなメリットですね。また機会があれば参加してみたいと思っています。



小樽港探鳥会風景 小樽市祝津(高島岬)

【記録された鳥】アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、マガモ、スズガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、ハギマシコ、シメ、スズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ドバト 以上 33種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、岩崎孝博、白田 正、岡部良雄、岡部三冬、加藤 猛、北山政人、栗林宏三、笹谷俊章、白澤昌彦、清水朋子、高田芳郎・陽子、品川睦生、鈴木麻美、高橋良直、高田征男、高栗 勇、田中志司子、田中 洋、田中雅子、戸津高保、中正憲信・弘子、濱野由美子、辺見敦子、広木朋子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山口和夫、山本昌子 以上 33名

【担当幹事】白澤昌彦、中正憲信、梅木賢俊

野幌森林公園探鳥会

2006. 2. 5 札幌市南区 大表 順子

先日の大雪とは打って変って快晴の朝、絶好の探鳥会日和です。除雪はすこし辛かったけど元気を出して参加しました。予想通りの雪道でラッセルが大変でしたが、いつもの顔ぶれのカラ類、オオアカゲラ、コゲラと順調に出現です。ウソがいるとの声にすっかりウレシクになりました。この冬はじめての対面です。ブルーグレーの中に緋色がとても映えて美しい大好きな鳥です。いつ迄も見たいけれど・・・キバシリがいました。木の間に100羽以上の群が。マヒワとの事でした。残念ながら間近で見られず次回におあずけです。雪道はどんどん辛くなり、真っ青だった空も灰色となり雪が降って来ました。小鳥も松の木陰に避難してしまったようです。お利口さんですね。

心地良い汗をかき気分はルンルンなのですが、足が悲鳴をあげだしました。雪が小降りになると小鳥の声も聞こえるのですが、気持は終着点の事になってきました。鳥合わせの直前にエナガも確認できました。楽しい半日をありがとうございました。

【記録された鳥】トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、マヒワ、ウソ、カケス、ハシブトガラス

以上 16種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、辺見敦子、大表順子、川村宜子、小西美美枝、品川睦生、田中洋・雅子、戸津高保、原 美保、松原寛直・敏子、山口和夫、山本昌子、安 真一郎、横山加奈子

以上 17名

【担当幹事】松原寛直、山口和夫

鳥民だより

●総会のご案内

日 時：平成18年4月7日(金)午後6時30分

場 所：札幌市民会館 第3会議室

総会終了後に懇親会を予定しております。会員の皆様、多数ご参加下さい。

●野鳥写真展と写真募集のお知らせ

〈野鳥写真展〉

期 間：平成18年4月25日(火)～5月15日(月)

場 所：光映堂2階ギャラリー

札幌市中央区大通西4丁目

TEL 011-261-0101

展示作業は4月24日午後5時30分から、撤去作業は5月15日午後5時30分から行います。お手すきの方はご協力を願います。

〈写真募集〉

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四ツ切り、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を添付して下さい。送付は光映堂の小林さん迄。4月24日に直接持参する場合は事前に連絡願います。作品一点につき、光映堂の本店と地下街店で使える商品券(1,000円)を一枚進呈します。



問い合わせは 小堀 煌治

011-591-2863 (午後7時～10時)

●会費納入のお願い

この号(第143号)と一緒に郵便振替用紙を入れてあります。速やかな会費納入をお願いします。

●入会勧誘にご協力を

お友達、お知り合いの愛護会入会をお誘い下さい。愛護会会員は個人会員、家族会員を合わせて現在410名ほどですが、今後の健全運営のためには450名を超える会員(会費納入)が望まれます。会員の皆様のご協力をお願いします。

●「野鳥だより」原稿募集

北海道各地の探鳥地紹介、野鳥観察記録、希少種観察記録、野鳥に関わる話題・随筆・紀行文などの原稿を募集しています。表紙写真の投稿も歓迎です。詳細については広報代表・樋口孝城(TEL 011-771-4470)にお問い合わせください。

【新しく会員になられた方々】

平野 規子 札幌市豊平区

島崎 康広 千歳市北光

宿泊探鳥会のお知らせ 5月の利尻・礼文は野鳥がいっぱいで

平成18年度の宿泊探鳥会は「今度は島に行きましょう」という声に押されて、利尻島・礼文島になりました。当会会員で利尻島自然情報センターを主宰する小杉和樹さんが利尻島の案内を、また、同じく当会会員で礼文島出身の道場 優さんが礼文島の案内をしてくれます。この時期の利尻・礼文は夏鳥がそろい始め、山野も水辺も鳥がいっぱいです。さて、鳥合わせでは3桁の大台にどれだけ迫れるでしょうか。

月 日 5月2日(火)～5日(金)

集合場所 札幌市中央区大通西3丁目

道新ビル前(大通り側)

集合時刻 2日午後9時

札幌帰着 5日午後7時頃

定 員 40名

参加費 3万9千円

(交通、宿泊、食事などすべて込み)

申込み先 蒲澤会計幹事

TEL 011-663-9783

4月1日午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締切ります。

以下はおよその予定です。参考にして下さい。

1日目(5/2)22:00 バス出発

2日目(5/3)05:00頃

稚内着(朝食)、06:30

連絡船稚内発、08:10 利尻島鷺泊着。以後、利尻島にて探鳥。

町営ホテル利尻(01638-4-2001)泊。

3日目(5/4)10:05 連絡船鷺泊発、10:45

礼文島香深着。以後、礼文島にて探鳥。

民宿「はな心」(01638-6-1648)泊。

4日目(5/5)08:45 連絡船香深発、

10:40 稚内着、12:00頃バス稚内発。

☆食事は2日目朝食から4日目昼食までです。

☆3日目(利尻)、4日目(礼文)には早朝探鳥(自由参加)ができます。



☀ 探鳥会は、悪天候でない限り開催します。

☛ 昼食、双眼鏡などの観察用具、筆記具、野鳥図鑑などをご持参ください。

(融雪期や雨天の時は、防寒衣、雨具、長靴などを用意してください。)

🚗 公共交通機関を利用される場合には、事前に時間などをお確かめください。

☆ 探鳥会の問い合わせ

(社)北海道自然保護協会 ☎ 011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

| 開催日 | 探 鳥 地 | 集合場所及び集合時間 |
|-----------------|--|----------------------|
| 4月9日(日) | 野幌森林公園 | 大沢口、午前9時 |
| | JR新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車、JRバス(文京台循環線)文京台南町下車、徒歩5分。長靴や防寒衣などが必要。 森林内の残雪の中からフクジュソウが咲き始める季節、さえずりやドラミングを聞きながら早春の鳥を探します。 | |
| 4月23日(日) | 宮 島 沼 | 大富会館跡湖畔側、午前10時 |
| | JR函館本線岩見沢駅発、又は学園都市線(札沼線)石狩月形駅発、中央バス(月形行又は岩見沢行)、大富農協前下車、徒歩5分。 雪解け直後の湖面で羽を休めるマガンたちを観察します。壮観な大群の飛翔は春の風物詩であり、感動します。 | |
| 4月30日(日) | 野幌森林公園 | 大沢口 午前9時 |
| | 交通機関は、4月9日の案内参照のこと。 ミズバショウの花が満開になる森林の中で、キビタキやオオルリなどを探します。 | |
| 5月2～5日 (火、金) | 利尻・礼文(宿泊探鳥会) | 本号の13ページ参照 |
| | 最北端の島の自然のなかで種々の野鳥を楽しみます。 | |
| 5月7日(日) | 藤 の 沢 | 白鳥園、午前9時 |
| | 定鉄バス札幌駅発(定山溪行又は豊滝行)、地下鉄真駒内駅発(藤野3条2丁目行)、藤野3条2丁目下車、徒歩10分。 早春の芽吹きや花を楽しみながら、白鳥園の裏山(藤野マナスル)で探鳥します。 | |
| 5月14日(日) | 千歳川周辺(早朝探鳥会) | 孵化場手前の橋付近の河川敷広場、午前5時 |
| | 早朝のため交通機関はありません。自家用車の相乗り希望の方は幹事まで相談してください。防寒衣必携のこと。 千歳川沿いの豊かな自然の中で、オオルリ、キビタキ、ヤマセミなどを探します。 | |
| 5月21日(日) | 野幌森林公園 | 大沢口、午前9時 |
| | 交通機関は、4月10日の案内参照のこと。 春の息吹きに彩られた森林内で、勢揃いした夏鳥たちのさえずりを聞きながら探鳥します。 | |
| 5月28日(日) | 鶴 川 河 口 | 四季の館 駐車場、午前9時30分 |
| | 札幌駅ターミナル(大谷地ターミナル)発、道南バス ベガサス号利用、鶴川(四季の館)下車。 四季の館駐車場に集合。 河口周辺や人工干潟でシギ、チドリ類や海鳥たちを、牧場周辺では草原の鳥や猛禽類を探鳥します。 | |
| 6月4日(日) | 植苗ウトナイ | JR千歳線植苗駅前、午前9時10分 |
| | JR千歳線 植苗駅下車。 ノゴマ、コヨシキリなどの草原、原野の鳥たちを探鳥します。 | |
| 6月10日(土) | 平和の滝(夜の探鳥会) | 平和の滝駐車場、午後6時30分 |
| | 地下鉄琴似駅発、JRバス(西野平和線)平和の滝入口下車、徒歩20分。 ツツドリ、ヨタカ、コノハズクなどの鳴き声を探鳥します。懐中電灯、防寒衣、防虫薬などが必要です。 | |
| 6月18日(日) | 東 米 里 | 東米里小中学校正門前、午前9時 |
| | 地下鉄菊水駅発、JRバス(米里線)東米里小学校前下車。 カッコウの声がわたる草原や河川沿いでエゾセンニュウ、コヨシキリなどを探鳥します。 | |
| 6月26日(日) | 野幌森林公園 | 大沢口、午前9時 |
| | 交通機関は、4月9日の案内参照のこと。 鳥たちの営巣の最盛期、森林内で餌を忙しく運ぶ鳥たちを観察します。 | |

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>